

『東方』三〇三号より

『マオ』の真贋を読む

矢吹 晋（元横浜市立大学）

『マオ』のイギリス版が出たのは昨年六月、アメリカ版が一〇月に出て、邦訳は一月に出た。『毎日新聞』（二〇〇五年二月四日）と『読売新聞』（同七日）は、来日した著者をインタビュし、『朝日新聞』（二五日）では、青木昌彦、加藤千洋両書評委員が「今年の（お薦め）三点」のなかに挙げた。青木昌彦曰く、「二十世紀中半の東洋史（神話）の書き直しを迫るインパクトをもつ」。加藤千洋曰く、「中国政治で決定的な要素であるはずの農民に、富農出身の毛沢東は強いシンパシーを実は持っていなかった。意外な毛像を提示したのが『マオ』だ。旧ソ連資料を用いて書きかえられた毛沢東像、中国現代史の「真相」は衝撃的だ」と。年が明けて『日本経済新聞』（二〇〇六年一月八日）は、国分良成教授の書評を、『朝日新聞』（同一八日）は、松原隆一郎教授の書評を掲げ、「二十世紀の国際関係史は根本的に見直しを迫られる」と書いた。天児慧教授（『現代』二〇〇六年一月号）に至っては、「衝撃」「衝撃」を繰り返した。毛沢東を描いた天児著『巨龍の胎動』の「絶版宣言」を告白するならば潔いが、結論のまったく異なる『マオ』を手放して褒めるのは、無節操極まりない。大新聞、有名学者がこぞって大宣伝に努めた結果、ベストセラーのトップを続け、ブログではいまや『マオ』の議論を前提としたやりとりが広く行われ、これが「ナウイ中国イメージ」扱いられている。由々しい事態ではないか。『マオ』は、全編これデタラメのオンパレードと言い切つてよいのだが、ここ

トップページにもどる

ユン・チアン、ジョン・ハリディ著／土屋京子訳
『マオ——誰も知らなかった毛沢東』（上・下）
四六判・上五六六／下五六〇頁・講談社・各二、三二〇円



では張作霖爆殺事件と上海事変に話題をしぼろう。「爆殺事件」は、こう書かれている。

「張作霖爆殺は一般的には日本軍が実行したとされているが、ソ連情報機関の資料から最近明らかになったところによると、実際にはスターリンの命令にもとづいてナウム・エイティンゴン（のちにトロツキー暗殺に関与した人物）が計画し、日本軍の仕業に見せかけたものだという」（邦訳上巻二〇一ページ）。原文はどうか。This assassination is generally attributed to the Japanese, but Russian intelligence sources have recently claimed that it was in fact organized, on Stalin's orders, by the man later responsible for the death of Trotsky. Naum Etingon, and dressed up as the work of the Japanese.（アメリカ版一七五ページ）。（矢吹訳）しかしロシア諜報機関の資料は、実際にはスターリンの命令で組織され、トロツキー暗殺に

責任を負うナウム・エイティンゴンによって実行され、日本軍の仕業に見せかけた、と最近主張している」。

いま私が下線を引いたように、邦訳は「最近明らかになった」と既定の事実のように描いているが、原文は「諜報機関が」主張している」だ。つまり「明らかに」な」と断定するのは早計であり、スパイの手柄話、自慢報告のなかに、その記述があるといった趣旨にすぎない。問題の一つは誤訳である。原文では「主張している」にすぎないものが、訳語では「明らかに」な」ともはや確定的だ。もう一つは、原文自体の誤りだ。著者の典拠は何か(講談社ホームページの『マオ』専用サイトに掲載されている注釈を参照)。Kolpadiki & Prokhorov 2000, vol.1 pp. 182-3 (from GRU sources) ; key role also played by Sorge's predecessor, Salnin. Indirect confirmation of this is a photograph of the Old Marshal's bombed train shattered in Vinarov's book (opposite p.337) ; caption says 'photograph by the author'. 資料はGRU (旧ソ連国防省参謀本部諜報部) の本であり、カギになる役割を果たしたのは「ゾルゲの前任者サルニン」だという。もう一つの間接的証明なるものは、ヴィナロフの「本の写真」で、「本人撮影」のキャプションがつけられている由だ。

これだけの記述から、「張作霖爆殺事件はスターリンの陰謀であった」と信じ込むのは、よほど脳細胞の単純な人か、陰謀好きのマニアか、あるいは知的水準の疑わしい知識人たちではないのか。情報は具体的に検証しなければならない。当時の満洲では、張作霖の部隊と日本関東軍が対峙していた。その周辺には国民党の諜報員、中国共産党の諜報員がいて、さらにコミンテルンすなわちスターリンの諜報員もいた。関東軍高級参謀河本大佐らがこの事件を企

▶ トップページにもどる

画し実行した固い事実を、この程度の「スパイ情報」で覆せるものか。事件について「事後に」、諜報員たちがそれぞれの報告を上司宛てに書いた可能性はあろう。写真も添えたであろう。したがって参考文献として挙げられている Vinarov Ivan, *Boysi na Tikhya Front*, Izd. na BKP, Sofia, 1969. なる「ブルガリアで一九六九年に出た」とされる本のなかに、写真があってもおかしくはない。こうして「ゾルゲの前任者サルニン」の指揮のもとで、「トロツキー暗殺に関わったナウム・エイティンゴン」が実行し、「ブルガリア人ヴィナロフ」が写真を撮影した。これが張戎夫婦の妄想した「スターリンの陰謀」である。私はむしろ、この分野の専門家によって陰謀物語の信憑性が点検されることを期待するが、虚構につきまとう臭気がふんぷんしているのは否みがたい。この本はデタラメだらけであり、他のあまたの間違いから類推して、この部分も歴史の偽造の可能性が強く、妥当な結論とはとうてい認めがたい。

もう一例を挙げよう。第二の陰謀物語もスターリンの指令に始まる。すなわち上海事変で日中戦争が拡大したのもスパイの謀略によるという。当時国民党軍の南京上海警備区総司令官であった張治中をスパイに仕立てる話だ。彼は中国共産党の「秘密党员」であり、一九三七年八月、「スターリンの指令に基づいて」、「大山中尉殺害事件などを引き起すことによって日本軍の戦線を華中まで拡大させ、日中全面戦争を導いた」と説く。この荒唐無稽な珍説を自画自賛して、「張治中は史上最も重要な働きをしたスパイと呼んでも過言ではないだろう。ほかのスパイは大半が情報流しただけだが、張治中は事実上たった一人で歴史の方向を変えた可能性が大きい」、「これは、おそらくスターリンにとって大成功の作戦だった」、「張治中と接触したソ連

大使館付き武官レーピンとソ連大使ボゴモロフは、直後に本国に召還され処刑された」（邦訳上巻三四四ページ、アメリカ版二〇三ページ）と書く。

張治中將軍スパイ説については、イェール大学ジョナサン・スペンス教授の書評「モンスターの肖像」（『ニューヨーク・レビュー・オブ・ブックス』二〇〇五年一月三日号）が明確に否定した。「当時、国民党と共産党が争っているところに日本軍が介入した。三者がそれぞれの諜報部員と暗殺組織をもち、その一部は二重スパイ、あるいは三重スパイであった事例は確かに存在する」、「一つは国民党と共産党との国共合作のため、相互の連絡調整は不可避であった。将校たちはかつて一九二〇年代初頭に広州近くの黄埔軍官学校で共に学ぶ関係にあり、そこではコミンテルンのオルグたちが活発に活動していた。蔣介石は学校長、周恩来は政治部主任であった。蔣介石は軍事訓練を学ぶためソ連を訪問し、周恩来はフランス勤工儉学から帰国したばかりであった。蔣介石のお気に入り張治中將軍が一九四九年に蔣介石とともに台湾に撤退せず、大陸の八路軍に降伏したのは事実だが、ここから類推して張治中將軍スパイなる新説を出す前に、次の点を検証せよ。①スターリンは日本との戦争を拡大するために、どのようにして、張治中將軍を眠りから覚めさせ、活動を始めさせたのか。②上海を基地とするコミンテルンのスパイは、まだモスクワのスターリンと秘密の無線通信を保持していて、それを張治中將軍に伝えたというのか。③張治中將軍が眠りから覚めるまでの、実際の任務は何であったのか。」

『張治中回想録』（一九三六年二月の記述）によると、当時国民党軍官学校校長を務めていた張治中は、蘇州上海地区を日本軍から防衛する「秘密計画」を立案した。この仕

▶ トップページにもどる

事は一九三七年になって、張治中が青島の医療施設で治療を受けたときも続けたが、一九三七年七月九日、日本軍が華北を攻撃したニュースに接するや、彼は急いで南京・上海地区防衛のために戻った（『張治中回想録』中国文史出版社、一〇九、一一一、一二六―一二七、一二三、一三九ページ）。スペンス教授は続ける。「（張治中が）共産党のために働いているようには見えない。張治中將軍は日記で、一九三二年初め上海で日本軍と積極的に闘ったことを記した。蔣介石が南京に戻ったとき、空港で張治中に会い、張治中の報告を聞いたうえで、部下として信頼した」。張戎は張治中將軍が「日本軍との戦闘に積極的であったために、一九三七年九月に辞任させられた」と書く。だが、上海地区での日本軍初期の勝利以後、「張治中は上海から湖南省知事に配転された。これは左遷ではあるまい。蔣介石の全体計画は長江の南にある湖南省を越えて西南に移動しようとしていたから、湖南省は中国の将来にとってカギになる地域なのだ」、「一九三七年一月、張治中將軍は黄埔軍官学校以来十年ぶりに周恩来ら同校の旧知の仲間と再会した。張戎は『張治中回想録』を援用しているが、その主張を裏付けることはできない」。スペンス教授は『マオ』の主張の核心の一つを崩して見せた。実に見事であり、「書評の鑑」だ。コロンビア大学ネイサン教授の書評「翡翠とプラスチック」（『ロンドン・レビュー・オブ・ブックス』二〇〇五年一月一七日号）も、徹底した「資料操作」批判を行い、著者の欺瞞性を完璧に抉りだしている。私はここで、爆殺批判や「スパイ説」批判など日中戦争に関わる論点にしぼって検証した。『マオ』の基調は、毛沢東が「ヒトラーよりも悪い悪魔だ」という繰り返しである。曰く、毛沢東は「平時において七千万人を殺害した」、「殺害を楽しんだ」、

殺害の開始時期と殺害者数において「スターリンよりもヒトラーよりも早く、その数は上回る」と。この暴論に接して、これを褒めそやす大学教授たちの無恥無能には、空いた口がふさがらない。

＊追記。三笠宮崇仁著『古代オリエント史と私』（学生社、一九八四年）には、悲痛な日中戦争体験が綴られている（一六、三七ページなど）。これと対照すると、『マオ』の引用（上巻三七七ページ）のデタラメぶりがよく分かる。

[トップページにもどる](#)